

【 か が わ と よ ひ こ 】

賀川豊彦

1888（明治21）年～

1960（昭和35）年

ノーベル賞候補にも挙げられたほど世界的に名の知れた世界平和提唱者。

農民組合を組織したり、生活協同組合の生みの親とも言われたりした。

関東大震災の時直ちに救援活動をし、ボランティア活動のさきがけとなった。

豊橋時代の経験が、彼の生き方に大きく影響。



『日本キリスト教史における賀川豊彦』
賀川豊彦記念松沢資料館／著
新教出版社／発行



『一粒の麦』

賀川豊彦／著 賀川豊彦『一粒の麦』を再版する会／発行

生い立ち

兵庫県神戸市で、回漕業者の父賀川純一と芸妓の母かめの間に生まれた。4歳のときに父が、5歳のときに母が亡くなったが、生母が正妻ではなかったため、姉とともに徳島の本家に引き取られた。

旧制徳島中学時代、13歳のときに結核と診断されたが、宣教師 C・A ローガンに英語を学び、16歳のときに教会に導かれ H・W マヤスより洗礼を受けてクリスチャンとなった。以後、物心両面の援助を、マヤスから受けることとなった。

賀川を信仰に導き暖かい保護者となったのはマヤス夫妻であった。後に、賀川は「マヤス先生は信仰の父です。私が貧乏

していたときに、いつも金をもらいに行ったのはマヤス先生でした。17のときに40日間抱いて寝てもらい、19のときに肺病で倒れているときにも蒲郡の漁師の家の畳の^{むしろ}ないところで、2日も一緒に筵の上で寝てくれたのもマヤス先生です。・・・」と述懐している。蒲郡への転地療養は、当時豊橋に在任していたマヤスの勧めによるといわれ、また神戸神学校ではマヤスは教授であったというように深いつながりを持っていた。（『三河と賀川豊彦』より）

賀川は、中学時代より文才を現しており、ラスキンの『胡麻と百合』を翻訳し、また明治学院高等部在学中には、『世界平和論』を徳島毎日新聞に連載している。

1907（明治40）年3月、明治学院高等部予科に在学中、新設の神戸神学校への転校を決意、開校までの間愛知県の岡崎や豊橋で伝道の手伝いをしていた。



賀川の生き方に大きな影響を与えたと思われる長尾巻ゆかりの旭町教会（現豊橋中部教会）

※H・Wマヤス…アメリカ人宣教師で1897年来日。岡崎、徳島、豊橋を経て、1909年から神戸で伝道。徳島時代には義兄C・Aローガンと協力して徳島教会の建設に当たり、1904年には賀川豊彦を導いて授洗した。後に神戸神学校の校長となった。

豊橋時代

同年 7 月、豊橋市東八町の豊橋教会に移ったが、ここでの長尾巻牧師との出会いがその後の生き方に大きく影響を与えることとなった。賀川は、札木町辺りでもっぱら路傍伝道を行ったようである。ところが、ここで発熱咯血したため、長尾家の人々は死線をさまよう賀川を親身にまさる看病をした。このときの経験とその後の活動を書き綴ったのが、名著『死線を越えて』である。

豊橋滞在はわずか 1 ヶ月余りでしかないが、自分が世話になった長尾巻牧師の生き方



『一粒の麦』を読んで感動した豊橋市向山町の故笠原氏が津具に建てた記念碑

から強烈な何かを与えられたことは確かであり、またこのことが、2 年後の神戸の貧民窟新川入りに大きな影響を与えたともいわれる。

1936（昭和 11）年、長尾巻牧師召天 3 周年に行われた記念講演会での賀川の発言について『青春の賀川豊彦』の中に次のように記されている。

「……信仰生活 49 年の間、聖日を数えること二千百回、その間ただの一度も守らなかった日はなかった。彼は貧乏のどん底にしながら、愚痴、不平を一度だって彼の口から聞いたことがなかった。

また彼が怒ったのを見たことがなかった。彼の行いは満点であった……。

自分が日本中の牧師で一番感心し、自分が一番感化を受けたのは長尾巻である。（略）」

蒲郡や津具にも

その後、蒲郡や津具でも転地療養をしたが、後年大ベストセラーとなった『一粒の麦』は、このときの経験がもととなっている。

蒲郡での療養期間は 1908（明治 41）年 1 月から 9 月までであり、場所は蒲郡市竹島町であった。この療養中に、後に『死線を越えて』として残る小説の前半『鳩の真似』を書いたといわれている。その 12 年後、神戸新川のスラム救済活動の経験を後半に書き足したものを『死線を越えて』として出版し、これも空前のベストセラーとなった。

代 表 作 品

著 書 名	刊 行 年
精神運動と社会運動	1919（大正 8）年
死線を越えて	1920（大正 9）年
自由組合論	1921（大正 10）年
壁の声きく時	1924（大正 13）年
一粒の麦	1931（昭和 6）年
農村社会事業	1933（昭和 8）年
新協同組合要論	1947（昭和 22）年
宇宙の目的	1958（昭和 33）年

標高 700 メートルの涼しい高原である津具にて、賀川は療養をしながら伝道活動を行っていたようである。現在、上津具の下町交差点には『一粒の麦』を記念する記念碑があり、下津具保育園前には賀川が揮毫した村井與三吉の記念碑がある。村井は下津具校で教鞭をとりながらキリスト教伝道にも心血を注いだ人であり、賀川にとって大きな影響を与えた先生であった。『一粒の麦』の中の村野先生とは、この村井がモデルである。『一粒の麦』は貧しかった農村を更生させる様子が描かれたすばらしい作品として評判となり、映画化もされた。